
極短な話

青井冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極短な話

【Nコード】

N0876X

【作者名】

青井冬

【あらすじ】

極端に短い話、略して極短な話。一話完結形式で、愛情や友情や人情や慕情や哀情や純情や恋情を書き散らかしています。

ごく短い掌編ですので、お忙しい方でも安心してご利用になれます。

00. 極短な話 成分表示

各話の傾向と対策について。

◆無理心中編

無理心中をもくろむ女と求婚をもくろむ男。後味がよいかどうかはともかく愛はあります。

ヤンデレという指摘をいただいて「そ、そうか!」と気づきました。ヤンデレです。

主成分…恋愛、ブラック?

◆終わらない今日

少年と少年の明日は来るのか。

少年をお好みの方にお勧めです。ほのぼのしています。

主成分…少年、友情、ほのぼの

◆きみはゆく

去る女と残される男。ある種の避けられない別離というやつです。見方を変えれば、よくある幸せな話です。

主成分…人情、そのうちいいことあるから元気出して

◆再会

長い年月を経て、彼女と彼は再会した。思ってもみない形で。

純愛路線です。

主成分…純愛、再会、ところでここはどこ

◆真実の愛

間の悪い話なのか、最高に間のよい話になるのか、よくわかりませんが後者のほうが好きです。

主成分・・失望、自殺、真実の愛

01. 極短な話　（無理心中編）

「ああ、死にたいわ。あなたと一緒に」

藪から棒に彼女が物騒なことを言い出したので、彼は驚いた。

「どうしたんだ、いきなり。何かあったのか？」

「そうね……特に何もないわ。しいて言うなら、わたしがあなたに捨てられる寸前ってことくらいかしら」

彼女は答えた。投げやりな口調だった。思ってもみない発言に彼はますます戸惑った。

「俺がきみを捨てるだって？　ありえないよ」

一瞬、彼女は彼の言葉を信じたような顔をした。しかし結局は、悲しみに満ちた瞳で、首を横に振った。

「とぼけなくていいのよ。このところ、わたしを避けているでしょう。滅多に会ってくれなくなったし、約束をしても直前に潰れたことが何回あったかしら。もう、わたしの顔なんか見たくないのね……あなたに捨てられるくらいなら死んでしまいたい。あなたを道連れにしてみたい」

「とんでもない誤解だ！」

彼は叫んだ。次に困ったように笑った。全力で彼を愛してくれる彼女が、彼のやることなすことに一喜一憂してくれる彼女が、可愛

くてしかたなかった。

「きみは本当に早とちりさんだな。そのうえ妙に行動力もあるから、俺は気が気じゃないよ。なんとしても重石をつけて俺に縛りつけておかないと、安心できない」

彼は懷から指輪を取り出した。

「結婚しよう。ハネムーン休暇をもぎとるために、この数週間は働きづめだったんだ」

「まあ……」

「一緒に死ぬのは八十年後くらいにして、それまではふたりで一緒に生きないか？」

彼女は自分の指にはめられた指輪を見下ろし、呆然とした。そして呟いた。

「大変。さつきふたりで飲んだワイン、致死量の毒を入れちゃったわ」

01. 極短な話　く無理心中編く（後書き）

結末は三択。

- （1）あの世で結婚する。
- （2）運良く毒入りでないワインだったので、この世で結婚する。
- （3）その他。

02. 極短な話　く終わらない今日く

「おまえなんか絶交だ！」

少年Aは怒鳴った。

「俺だっておまえなんか絶交してやる！　今日こそ本気の本気だからな！」

負けじと少年Bも言い返した。

「よし、あの夕陽が沈んだら、おまえと俺はもう赤の他人だ。こんりんざい、口も聞いてやらない」

「望むところだ。沈むぞ、もう沈むぞ……あっ」

「あー……し、沈んだ」

日没まではあっという間だった。彼らの今日が終わった。

「ふ、ふん！　絶交だな」

「ぜ、絶交だ。あばよ！」

少年たちは互いに背を向け、それぞれ反対の方向へ駆けだした。しかしすぐに、どちらからともなく、ぴたりと足を止めた。振り返らないまま、ふたりは同時に叫んだ。

「やっぱり明日の夕陽が本番な！」

03. 極短な話　（きみはゆく）

彼は彼女を心から愛していた。

長い間、本当に長い間、彼女に夢中だった。

それは今でも変わらない。変わってしまったのは彼女のほうだ。

かつては彼女も彼だけを見つめ、愛してくれた。彼は彼女のヒーローだった。

彼女が笑いかけてくれるだけで、天にも昇る心地だった。どれほど疲れていても、どれほどずさんだ気持ちのときも、彼女が抱きついてくれるだけで、彼女の安らかな寝顔ひとつで、いつでも彼は幸せになれた。

それなのに彼女は別の男を選んだ。彼を置いていこうとしている。

いつかはこういう日が来るかもしれないと思っていたが、覚悟はできていなかった。失うことを考えたくなくて、彼女を独り占めしている幻想にひたっていた。

予兆はおそらく何度もあった。彼はそれらを無視した。そうすれば彼女が離れていかないとでも信じているかのように、素知らぬふりで彼女の愛にすがっていた。彼の盲信はもちろん錯覚だった。

「今まで、ありがとう」

彼女はそう言い残し、憎き男のもとへ去った。彼の天使は、ほかの男の妻になってしまふのだ。昔は結婚の約束までした彼を、優し

い笑顔で彼女は捨てていった。

彼は悲嘆にくれた。

「――娘なんて、持つものじゃない」

04. 極短な話（再会）

その後ろ姿を見たとき、直観めいて彼女にはすぐわかった。彼だ。

「あらっ、タロウさんじゃない？」

思えばそれは不思議なことだ。

最後に彼と顔を合わせたのはもうずいぶん昔のことで、それから幾星霜を経て彼女は今に至った。にも関わらず、長い年月を背負った証のように曲がった背を目にしただけで思い出したというのは、よほど忘れがたかったからだろう。

彼は彼女の人生における、特別な人だった。

「久しぶりね。わたしが誰だかわかるかしら」

「ミヨさん！ まさかこんなところで会えるなんて。何十年ぶりだろうか」

振り返った彼はやはり彼だった。

変わっているのに変わっていない。不思議なほど、記憶の中の面影にぴたりと重なる。

自分の名を言い当てられて喜ぶよりも、まず驚いた。時間は彼女に、過剰なほどの痕跡を残している。彼以上に外見が変わっているはずだった。

「当たり前よ。あなたが遠くの学校へ行って以来だから、だいぶ経つわね。懐かしいわ」

「ああ、本当に」

嬉しそうな相手の反応に力を得て、彼女は突如、人生の心残りを片付けたいという衝動に駆られた。次の瞬間には、勢いのまま口をひらいていた。

「ここで再会したのも何かの縁じゃないかと思うから、言っちゃおうかしら。実はわたし、あなたのことが好きだったのよ」

ずっと心のどこかに住み着いていた未練を、青い情熱というにはあまりに長く大切に続けてきた初恋を、彼女は初めて言葉にした。実に爽快な気分だった。

「なんだって。知らなかったよ、信じられない」

「あら、ずいぶんね。乾物問屋の娘が田舎町のハイカラな幼なじみを慕っていたのが、おかしいと言うの？」

「そうじゃないさ。てっきり僕の片恋だとばかり思っていたのに、心を通じ合っていたのが信じられなかったんだ」

聞き違いかと思った。しかし彼の昔のままひたむきに輝いている瞳は、言葉以上のことを彼女に告げていた。

「まあタロウさん、つまりそれは」

「僕もずっときみを想っていたよ。こんな爺さんに言われても嬉しくないだろうが……」

「とんでもないわ。タロウさんは相変わらず垢抜けていて素敵よ。わたしのほうが、こんなしわだらけのおばあちゃんに恥ずかしいわ」

「きみは昔と同じように、いや、よりいっそう綺麗だ」

「タロウさん……」

「ミヨさん！」

ふたりは手に手を取った。

「ところで、ここがどこなのか、あなたご存じ？」
「さあ。三途の川のほとりじゃないかな」

05. 極短な話　（真実の愛）

失言と失策による失政を重ね失笑を買いついには失脚し失職したところに失恋という失態を演じてとうとう失踪せざるを得なくなり、この人生は失敗だったという結論が出た。

彼は人生に失望した。

もう嫌だ死のう。できる限り派手に華々しく死のう。昔から、死ぬなら超新星爆発級でいきたいと夢みていた。

そう、木っ端みじんになりたい。

彼は爆弾を用意した。

そんじょそこらの爆弾ではない。漫画で見るような、黒い球体に導火線が繋がっているものを用意した。ここは譲れない。

彼はそれを抱えて無人の山奥に分け入った。他人を巻き込むつもりはなかった。孤独な人生は孤独に終止符を打たれるのだ。

分け入っても分け入っても青い山を眺め、ため息をつく。

俺の終焉にはなんと不似合いな、なんと美しい感動的な光景だろう。こんな心境でさえなければ、何かを新たに始めたいとさえ思っただかもしれない。

これまで知らなかった素晴らしい何かを。

彼は導火線に火を付け、爆弾を捧げ持った。自虐的なスリルに酔った。

そのときだった。彼ひとりしかいないと思っていた山頂に、もう

ひとりの人間がいたことに気づいた。

若い女性だった。驚くべきことに、彼と寸分変わらぬ形状の物体を胸に抱えている。

その姿を見て、一目でわかった。

彼女もすべてを失い、彼と同じ覚悟でここにいるのだ。

その瞳を見て、一目でわかった。

今こそ真実の愛を見つけた。彼も彼女も、互いにそれを確信している。

人生は薔薇色だった。

ふたつの爆弾が着火するまでコンマ〇一秒を切っていた。

05. 極短な話　く真実の愛く（後書き）

分け入っても分け入っても青い山

——山頭火

大丈夫大丈夫

間に合う間に合う

XX. 極短な話（まとめ）

——という夢を見たんだよ、と彼は言い、あらそう、と彼女は頷いた。

あれはすべて、僕自身のことじゃないかと思うんだ。

そうなの？ 恋人に毒を盛ったり、親友と仲良くけんかしたり、娘を送り出したり、黄泉路で初恋の人と再会したり、爆死を試みたりする夢が？

うん。生まれてくる前かもしれないし、未来かもしれないし、もつとずっと先の来世かもしれない。いずれにしろ、どれも僕だという気がするのさ。

壮大な夢を見たのね。

そして、常に隣にいた人も、すべて同じ人に違いないよ。そう感じるんだ。恋人、親友、親子、あるいは幼なじみ、運命の人。形は違えど、いつも近くにいます。

へえ。じゃあ今回もいるのかしらね。

その通りさ！ ここからが本題なんだけどね。

その話、長くなる？ 明日の予習をしたいから、もう帰ってもいい？

なんてことを。

だって明日の数学、当たるんだもん。

手短にいくから少しだけ時間を割いてくれよ。

予習しながら聞くことにする。ゆっくりどうぞ。

うん、つまりね……きみなんだ。僕が何度も巡り会っては長い時間を共有してきたのは、きみなんだよ。

ふうん。ねえ、この公式を使えばいいのかな。

違うよ、その前にこっちを使わないと。それでだね、恋人同士だったり親子だったり互いの運命の相手だったりしたはずの僕らなのに、今回は違うじゃないか。

あら、クラスメートだって立派な縁だと思うけれど。

でも、その他大勢と十把一からげでしかないよ。

そう？

そうさ。だから、あるべき形でないと思えてならないんだよ。

そう？

うん。

で？

えっ。

提案の形をとったひとつの結論を彼が口にするまでには、結局、かなりの時間を要した。

彼女の予習はすっかり済んでいた。

彼女はその一風変わった男女交際の申し込みを、なかなか悪くない、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876x/>

極短な話

2011年11月11日01時36分発行